



祐介の目

大田ゆうすけ No.39
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

した記録は無い。しかし、紫式部の祖父が「備後守」であったことから、祖父より頼の情景を聞いたのではないかと推定ができるという。

それにしても昨今の古典ブームには驚くばかりで、

古典ゆかりの神社仏閣を巡るようなツアーは大人気だ。福山にも明王院にある「三十八歌仙絵扁額」や、国際収蔵館の「絵入源氏挿絵貼屏風」などは大変なお宝である。これら福山の持つ古典ゆかりのお宝をもっとPRすれば、多くの人が福山を訪れるだろう。

さらに百人一首と言えば、私は中学生の時に百人一首大会で優勝した経験がある。別に百首を全部憶える必要は無く、「決まり字」憶えて「秋の田」とくれれば「我が衣手」という具合に、歌の持つ意味など関係なかった。しかし、大会が古典に親しむ良い機会となった事は間違いない。私は全中学校で百人一首大会を開催するよう議会で提案している。

落先生の講演によれば、源氏物語と百人一首の関連性は本当に奥が深い。百首の歌に隠された源氏物語に対するメッセージを解析する楽しみを知られば、さらに古典ファンが増え、来年はリーダーローズが満員になるだろう。

11月1日は古典の日

紫式部日記の寛弘5年11月1日の記述に、酒に酔った藤原公任から「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらひ」とからかわれたとある。「若紫」は源氏物語の登場する若い姫君であることから、年増の紫式部は頭に来たのだろう。しかし、この記述が日本を代表する古典文学である源氏物語が歴史上はじめて記録された日であることから、平成24年より「古典の日」に制定されたのだ。

今年の古典の日には、私の恩師である元広大附属福山高校の副校長であった落健一先生による講演会「源氏物語と百人一首」が開催され、県民文化センターが満員となった。

古典と言えば堅苦しく敷居の高いイメージがあるが、落先生の軽妙かつ興味深い講演に皆引き込まれていた。例として、源氏物語に頼の浦の情景描写があるが、紫式部が頼を訪問